

佳作

## 感動とは

イギリス ロンドン日本人学校六年 重富 智陽

「感動って何だろう？」

ぼくはこの作文を書くに当たってそう考えた。ぼくが愛用している学研の辞書で「感動」と探すとこう書いてあった。「ものごとにつよく心を動かされること」。

ぼくは六月下旬に骨折した。ぼくは絶望的な気持ちになった。スポーツは六カ月間やってはいけなと言われ、さらに骨折したうでが右うで、ぼくの利きうでだったからだ。そんな時、周りの人がしてくれた行動にぼくは心を動かされた。

例えばギプスをして街中にいったとき、色々な人から、

「Are you ok?」

と言われた。その度にぼくは、

「Thank you, I am ok」

たり気づかったりする行動や声かけは相手の心にとどいて人のところを動かすことがあることを知った。今度はぼくが、だれかの心を動かす、とまではいかないけれど、だれか困っている人のところに寄りそえる人になりたい。それには少しの勇氣と声かけ、そして小さな行動からはじまる。それはそんなに難しいことではなく、そして、とてもすてきなことはないだろうか。

と返したのだがみんながとても心配してくれて心のきず口にそっと手をあてられる思いだった。

さらに骨折してから三日後にいった修学旅行。ぼく達はお土産を買いに店に寄った。そのお店はとても小さくておばあさんが経営しているところだった。おばあさんはまゆをよせた表情で、

「Poor boy, I feel sorry for you」

と、言ってくれてぼくは心がしみる思いだった。

骨折をしなくてもぼくの住むイギリスではいたわりの心を身近に感じる事ができる。母から聞いた話だが、母が地下鉄に乗った際その車両に座席に頭をつけてひざを通路につけたまま動かない男性がいた。母はあまり近寄らなかつたが周りの乗り合わせた人々のはかたをそっと叩いたりしていたらしい。その後、男性は気付いて起き次の駅で降りていった、という話だがぼくはその話を聞いてぼくがその場にいたならどうしていただろう、と思った。ぼくも気持ち悪がって近寄らないかなと思ひ、乗り合わせた人々はすごいなと思った。

日本で同じことが起きていたらどうなるだろうか。

ぼくはイギリスでの経験を通して、人をいたわっ